



# 仏法領 ぶつぽうりよう

第90号

発行：真宗大谷派

念信寺

〒 824-0202

福岡県京都郡みやこ

町犀川上高屋761

☎ 0930-42-0329

Fax 0930-42-0502

ホームページ

nenshinji.org



## お寺の課題

中国から日本に伝わった仏教を「大乗佛教」と言い、大きな乗り物に喩えられています。自分一人の救いではなく、「自利・利他」の救いを大切にする教えだからです。「自利・利他」とは自分の救いはあらゆる他者の救い、あらゆる他者の救いが自分の救いという自他が別れない世界を教えています。このような精神をもつた修行者を「菩薩」と言います。自分に執着する私たちには遠いのですが、救いとは何かを追求してきた歴史のなかで見出した精神でしょう。

淨土真宗の教えの要には、やはり菩薩があります。「法藏菩薩」です。阿弥陀様とは法藏菩薩のことで、迷いの私たちとともに歩んでくれる存在が法藏菩薩です。私が称える「ナンマンダブツ」は阿弥陀様そのものである。その阿弥陀様は、あなたを必ず救うという法藏菩薩となつて私に願い続けています。このよな救済精神は人と人が触れあうことではじめて具体的に伝わるのでないかと思います。

急速に高齢化が進み、コロナパンデミック以降、地域社会も行事が休止してお互いに触れ合う場が少なくなっています。余裕のない社会情勢からも人間関係がだんだんギクシャクしていくのではないかと不安になります。お寺を取り巻く環境も例外ではありません。

仏教ってどういう教えなんだろう。何を私たちに与えてくれるのだろう。単に習慣的に葬儀や仏事にかかわるのではなく、そのようなことを大切に一人一人にお届けするものでありたいと思います。今後の計画として住職は次のように考えています。

- 法座の充実、定例法話の新設
- お寺の組織を世話をしない地区の人にも対応できるようにする（門徒会組織、情報通信手段等の活用）
- 納骨堂、墓園の仕組みの簡素化・拡充、永代管理
- 仏事の普及（電話での対応等）

これらに取り組みながら、どうしても避けられない事業として**本堂屋根の修理**があります。皆様のご協力をないとぞ宜しくお願ひ致します。

私は、自分から挨拶をしたい方だ。  
それが、私ができる  
小さな「ふれあい」の始まりだ。

初めて会った人でも  
顔なじみの人でも  
自分から話しかけて  
楽しんでみませんか。



（大迫光浩  
写真・文）

「ふれあい」  
幼い頃は、先入観なしに  
素直に手を繋げる。

大人になると

恥じらいや、人の目を気にして  
ふれあう事をためらう。

「ふれあい」は、手を繋ぐだけでなく  
「心」と「心」を開いて  
向き合う事ではないだろうか。

自分が心を開かないと  
相手も心を開いてくれない。

## 野田元首相の追悼演説で思う事

**吉田昭和**（北九州市小倉北区）

昨日、10月25日の野田元首相の安倍元首相への国会追悼演説を聞き、人の触れ合いを思った。野田さんの立場から安倍さんを見れば、首相の位置から降ろした最大の敵であり、政敵であつたはずである。しかしながら、全く主義主張が異なる二人の政治家は、私達国民が知らない場面では、お互いを尊敬し、労わると言う事があつたと初めて明かされた。また、総理大臣経験者として、その職責が如何に大変であったと初めて明かされました。また、総理大臣としての立ち位置は全く相反するものでしたが、お互いに政治家としては評価をし、尊敬しておられた事に敬意を表しています。

二人は、政治家としての立ち位置は全く相反するものでした。しかし、野田さんは、「長きに亘つてその職責を担当する事に敬意を表しています。只、二人は、政治家としての立ち位置は全く相反するものでした。しかし、野田さんは、「長く国家のかじ取りに力を尽くしたあなたは、歴史の法廷に、永遠に立ち続けなければならない定めです。」とも述べています。



國民が知らない場面では、お互いを尊敬し、労わると言う事があつたと初めて明かされました。また、総理大臣としての立ち位置は全く相反するものでした。しかし、野田さんは、「長く国家のかじ取りに力を尽くしたあなたは、歴史の法廷に、永遠に立ち続けなければならない定めです。」とも述べています。

今回の演説を聞き、強く思いました。二人は、政治と言う舞台で出会い、総理大臣と言う重責を担つた故に、お互いの人生に触れ合う事を感じていたのではないか。』

## ひと ふるさと どうきょう

今回も思い出に残るお同行さんたちを前坊守村上悦美に紹介してもらいます。



### 故郷のお同行

最近、ふと思いついたことがある。山口県瀬戸よりここに嫁いだ時のことである。里の父の言い草は「念信寺の御院家さんは杯の持ち方が天下一品である。あそこにお嫁に行け」と。父が上本庄の淨真寺さんに御正忌の法話のご縁をいただいた折、念信寺の耕二住職と話が進んだ様子である。

父もお酒好きで、お寺の近くで野良仕事をしている人を呼んできては一杯を楽しんでいた。母は家族のため、また来客のため、いつも駄々つ広いコンクリートの台所で一日中忙しそうにしていた。私の子供時代は戦中、戦後であつたし、当時の女性の就職は結婚であつた。そして父は「あそこにお嫁にいけ」の一点張りなのである。

最近、歳のせいで病院に入院することが多くなった。その際、病院のベッドの上で気にも留めてなかつた父の言葉が不意に立ち上ってきた。「羽山のおばあさんに嫁入り先の事を相談したら『気にはなろうが、そこにおやり。苦勞の中でこそ人は育つ』と言われた」。父と家の中ですれ違い様にその言葉が耳に届いたが、私の心中にまでは収まつてはなかつた。杯の持ち方が上手としか父の言葉は受け取れていなかつた。六十四、五年を過ぎて、どうして甦ってきたのか。不思議でならないが、生き様の底に沈んでいる日々のご縁のお導きかとも思える。

羽山のおばあさんは家の苦を抱えながら、遠くまで法座に出かけては徒步で明け方帰り、仕事をするという聞法に生きた人。賢く、しつかりしていて人間にとても信頼されていた。亡き今も同行さんの間では語り継がれ慕われ続けている人である。

羽山のおばあさんは家の苦を抱えながら、遠くまで法座に出かけては徒步で明け方帰り、仕事をするという聞法に生きた人。賢く、しつかりしていて人間にとても信頼されていた。亡き今も同行さんの間では語り継がれ慕われ続けている人である。

羽山のおばあさんは家の苦を抱えながら、遠くまで法座に出かけては徒步で明け方帰り、仕事をするという聞法に生きた人。賢く、しつかりしていて人間にとても信頼されていた。亡き今も同行さんの間では語り継がれ慕われ続けている人である。

羽山のおばあさんは家の苦を抱えながら、遠くまで法座に出かけては徒步で明け方帰り、仕事をするという聞法に生きた人。賢く、しつかりしていて人間にとても信頼されていた。亡き今も同行さんの間では語り継がれ慕われ続けている人である。

羽山のおばあさんは家の苦を抱えながら、遠くまで法座に出かけては徒步で明け方帰り、仕事をするという聞法に生きた人。賢く、しつかりしていて人間にとても信頼されていた。亡き今も同行さんの間では語り継がれ慕われ続けている人である。

羽山のおばあさんは家の苦を抱えながら、遠くまで法座に出かけては徒步で明け方帰り、仕事をするという聞法に生きた人。賢く、しつかりしていて人間にとても信頼されていた。亡き今も同行さんの間では語り継がれ慕われ続けている人である。

羽山のおばあさんは家の苦を抱えながら、遠くまで法座に出かけては徒步で明け方帰り、仕事をするという聞法に生きた人。賢く、しつかりしていて人間にとても信頼されていた。亡き今も同行さんの間では語り継がれ慕われ続けている人である。

羽山のおばあさんは家の苦を抱えながら、遠くまで法座に出かけては徒步で明け方帰り、仕事をするという聞法に生きた人。賢く、しつかりしていて人間にとても信頼されていた。亡き今も同行さんの間では語り継がれ慕われ続けている人である。

羽山のおばあさんは家の苦を抱えながら、遠くまで法座に出かけては徒步で明け方帰り、仕事をするという聞法に生きた人。賢く、しつかりいて

そんな中でテーマに沿つて書こうと思うと自然とお彼岸の話となるのですが、先日、納骨堂の片付けをしていた際、お水がコップに入つて供えられていきました。お水は故人の方が喉が乾かぬようとに供えられます。浄土真宗ではお淨土に往かれるため、あまりしませんが、それでも同じ様に扱い敬う風習は趣があり、良い心持ちだなと思いました。

近い間柄や遠い関係、生前の立場や思想の違いなど、人には様々あります。それでも故人を偲び、礼を尽くせる人であります。お彼岸も過ぎ思うところです。

（秋彼岸号に間に合わなかったので、今回掲載しました。季節感が少しづれているのは、そのためです。）

## お参りの日々

同行の一言をもて嫁がすと  
父の言の葉深きより湧く



悦美

## お参りの日々

念信寺衆徒 村上 宣

とおる

暑さのピークが過ぎ、肌寒さの増していく季節となりました。今年は大きな台風が来たとのことです。皆さんはご無事でしたでしょうか。

こちらはお彼岸も終わ

り、今回のテーマとして出された「お参りの日々」というお題に困

る程度には緩やかな日が続いています。



私は元々、ゆったりとした感覚なものも相まって緩々と日常を過ごしています。



■納骨壇は6寸の骨壺は6個、5寸は12個収納。  
2個、5寸2個入ります。  
80万円。



■多段型は一区画に骨壺6寸  
2個、5寸2個入ります。  
12～18万円

●納骨壇は6寸の骨壺は6個、5寸は12個収納。  
2個、5寸2個入ります。  
80万円。



※骨壺は一応の目安で、布袋に納めればさらに収納できます。



**秋彼岸法要**  
**「正信偈」** 生きて死ぬとは何なのか  
**法話**



日時 10月4日、5日 午後1時半より  
 講師 瓜生 崇 師(滋賀県 玄照寺住職)

1枚役所 緑の紙(離婚届け) いつまでも家族で一緒に



一年ぶりに参させていただき  
 ました。「正信偈」はもともと  
 は「正信偈」と言いま  
 す。「正信」は正しい信心。「念佛」ついて  
 うのは「ナンマンダブツ」。「正しい信心」  
 と、「ナンマンダブツ」の救いとは一体何  
 か。それについて書いたものが「正信念佛  
 偈」です。「偈」というのは「歌」という  
 意味なんですね。リズミカルに読みます。  
 この小さな偈文の中に親鸞聖人の教え、お  
 釈迦様の大乗仏教の流れが全部入っていると  
 言つてもいいくらいの密度の濃いお聖教で  
 す。まず最初の2行。

帰命無量寿如來 南無不可思議光  
 「帰命」は中国の言葉で、「南無(ナーム)」  
 はインドの言葉。意味は一緒です。「お任せ  
 します」。わかりやすく言うと「自分の全存  
 在をここに預ける」という意味です。  
 皆さんには、どんなものに自分を預けて生き  
 てますか。家、仕事、家族、子供ですか、親  
 ですか。僕らいろんなもの  
 に依存して、いろんなもの  
 を頼りにしていろんなもの  
 を抱えて生きてますよね。  
 ところが本当に当てになる  
 ものって何ひとつないでし  
 ょう。

に出すだけで、そんな関係つて崩壊しますも  
 んね。会社とかでも、退職したのその翌日か  
 ら、もうそこは自分の居場所じゃなくなるん  
 ですよ。自分の存在を支え  
 てくれるもんだと思ってる  
 ものつて実に狭くて、実に  
 小さくて、実にはかないで  
 すよね。

我々が生きているこの世界  
 だって、借家みたいなもん  
 で、いつか出でいかんなら  
 んもんじゃないんですか。  
 いかがですかね。自分の人  
 生っていうものを飾り立て  
 て立派なものにして、地位  
 を求め、名譽を求め、自分



の評判をよくして、実績を積み上げていって、  
 私っていうものを価値あるものにしていこう  
 としても、全部それを置いて出ていかなきや  
 ならん時が必ずあるじゃないですか。  
 私が死んだって、自分の記憶は誰かの中に  
 残るとか言いますよ。でも記憶なんかそんな  
 たいして残らない。自分のたった一人の世界  
 を握りしめて最後、死んでいくわけですね。  
 やっぱ虚しいわけです。だから、僕ら生きと  
 つたら何か空しいって言うんですよ。仕事一  
 生懸命やつたりとか、地域の活動したりとか  
 して、自分の人生は意味があるんだって言い  
 たいわけです。お釈迦様がなんで出家された  
 からって言つたら、自分のその姿に気づいたか  
 らんですね。なんで私、生まれてなんで生き  
 て、なんで病になつて、なんで老いて、なん  
 で死んでくんだって。それが宗教なんです。  
 大体普通はあんまりそんなこと考えないです  
 教えたのが佛教だと言う人います。お釈迦様  
 はそんなこと全然教えてない。その大事なも

のを失うところにしか、私たちは生きていけ  
 ないからです。じゃあ今の一瞬、今的一日を  
 精一杯生きていくことが大切なんだと。これ  
 もお釈迦様は言われない。一日を精一杯生き  
 ていけなくなる時が必ず来るんです。  
 お釈迦様は、生まれるとか死ぬとか、精一  
 杯生きるとか、そういうものは結局全部私が  
 いろんなものを都合つけてこれが善いとかこ  
 れが悪いとか、言つてるだけなんだって言う  
 んです。病気になるのいや、健康で生きてい  
 きたい。若死するのいや、長生きしていく  
 たい。最後静かに死んでって、いい人生送つ  
 たねとか言つたりするじゃないですか。これ  
 はもう全部が私の都合で、その人生に善し悪  
 しきつけてるだけだってお釈迦様言つんだ  
 ね。

あなたはその小さな心の世界の中で勝手に  
 物事を善し悪しで分け隔てして、それによつ  
 て苦しんでるんだ。本当のありのままの世界  
 は、そういう世界じゃないとお釈迦さんは言  
 うんです。小さい心の世界が破れた先には、  
 そんな一人ぼっちの世界じゃなくて、もつと  
 広い全てが平等な世界が広がつてるんだ。こ  
 れが本当の世界なんだ。



「帰命無量寿如來 南無不可思議光」って  
 書いてますでしょ。この「無量寿如來」って  
 阿弥陀さんのことです。「アミダ」っていう  
 言葉は、無限の時と無限の光っていう意味。  
 の電灯の光つて本堂を照  
 らす有限の光です。この  
 電灯に無限の光と無限の  
 命を与えるたらどうなるか。町全体を照らし、  
 宇宙全体を照らしていく。あらゆる人、あら  
 ゆる生きとし生けるもののところにこの光が  
 届いていく。僕らこういう光を今まで知らな  
 かった。影ができるような光しか知らなかっ  
 た。

我々が依りどころにしているのは影を作る  
 でしょ。家族でも子供でも学  
 校でも仕事でもなんでもいい  
 ですわ。影を作つて差別して  
 やつぱり強い明かりです。で  
 もね、それは強い影を作るんでしょ。光が当  
 たる人と当たらない人を作つていく。そうい  
 う分断を作つていく。親鸞聖人はそうじやな  
 いものがあると言つて。あらゆる生きと  
 し生けるものに届いて、平等に照らしていく  
 ような広い救いがある。私はその大きな願い  
 に、全てをお任せしますって。  
 自分を真ん中において、善い悪いとか、幸  
 せ不幸とか、正しい間違つてるとか、生きる  
 のはいいことで死ぬのは嫌だと、そういう  
 ところに迷つて苦しんで生きざるを得ない私  
 だけど、死ぬまでそういうところに迷つて執  
 着して生きざるを得ない私だけども、そんな  
 ものを超えた世界に目覚ませるつていう、そ  
 の願いが私に今届いてるんだと。どうやつた  
 つて自覚めることも、その広い世界を見るこ  
 ともできないけど、でもその広い世界を見せ  
 たといつて、この大きな願いが私を貫いて  
 るんだ。この願いに触れたんだ。だから、私  
 はこの願いに任せて生きようと思う。  
 僕らこんなに聞いたって、自分の小さな狭  
 い心をなんとか満たして幸せになつて生きた  
 いつというぐらいの生き方しかできない。で  
 も、そんな私がそれを遥かに超えた大きな願  
 いに買かれる。これが実は浄土真宗の教えな  
 んです。

じゃあその願いとは何ががこの後に出てき  
 ます。少し休みます。  
 (10月4日前席抄録)  
 録音がありますので、  
 希望者はお申出下さい。)



# 御正忌・報恩講ご案内



皆様には、時下ますますご清祥のことと存じます。はや、年の瀬も近くなり、報恩講の季節になりました。報恩講は親鸞聖人のご命日をご縁とする法座で、真宗門徒が最も大切にしてきた法要です。

コロナ禍を配慮して左記の日程で厳修させていただきますので、ご参詣聴聞くださいますようご案内申し上げます。

## 記

## ●日時 十一月二十一～二十三日

日 時	午後一時半	地区のお参り予定
二十一日（月）	法話二席	犀川谷地区・その他※
二十二日（火）	ご伝説・法話	上高屋地区・その他※
二十三日（水）	登高座・法話	城井谷地区・その他※

※その他とは、豊津・築上・行橋・刈田・田川・北九州等です。

●講師  
藤谷 知道 先生

宇佐市 勝福寺住職

- コロナ対策として
- マスクの着用をお願いします。
- お茶は各自ご持参ください。
- 法座は午後のみ、お斎はありません。
- 出来れば地区指定の日にお参りください。
- 本堂の椅子は余裕をもって配置し、換気に努めます。

二〇二二年十一月 みやこ町犀川上高屋  
妙見山 念信寺



10.7 所長歓送迎会 於久留米



10.8 莢田但信寺住職結婚式

## お寺の催し・活動



10.25 臨時組会 於念信寺



久留米九州教務所 o内仏



11.1 勤行時 夕焼け



10・14 教化体制研修 於浄喜寺

言葉も、迷いの世界での模索に思えます。

爽やかな秋日和が続くなが、南天が急に赤く色づいてきました。念信寺は南天屋敷といえるほど、南天の木があちこちに沢山あります。驚いたことに、その全てがんとうばえ（天道生え）だそうです。よほど念信寺の土と合ったのか嬉しい限りで、鳥たちにも感謝です。

コロナ禍でも、ご正忌・報恩講縮小でも、今年も穏やかな日々が過ぎて有難く思う今日この頃です。



## 行事予定

### ●四日市別院 団体参拝

12月15日（木）午前10時半よりバス団体参拝  
参加費四千円（お斎代お取扱含む）  
申込 12月1日までに

### ●六月十七（土）、十八（日）日

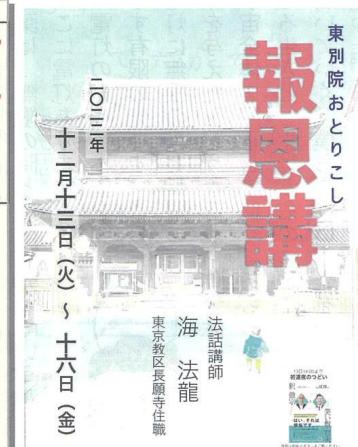
●皆作永代経彼岸法要  
講師 舟川智也 師  
(行橋市 関徳寺住職)

●九月三十（土）、十月一（日）日

●秋彼岸法要  
講師 瓜生 崇 師  
(滋賀・東近江市玄照寺)

●十一月二十一～

●ご正忌・報恩講  
講師 未定



10.28 二十八日講話会 於浄光寺



11.5 浄真寺掃除



10.27 ご法事手作りお斎

## あとがき

コロナパンデミック以

降、利己主義ではなく、「利他主義」、他者のために生きる生き方が識者から提唱されているそうです。これらはやわらかく言うと、人との触れ合いを大切にしようということでしょう。

そこで今回は「触れ合う」をテーマにしました。触れあう」というこの言葉から、小学生の時におしゃらまんじゅうをやつて他人の温もりに自分を見出した感動が思い出として甦ってきました。生き物としての自分を感じて、一人っ子の私にはほんとに新鮮な感動でした。

今言われている「利他主義」は、他のためにするのは結局自分のためになるという、利己主義の主張が強いようです。仏教いう利他は「自利・利他」の教えから来ています。詳しくは巻頭に書きましたのでご覧ください。それでも、瓜生師の法話の如く、「自分」という思いを抱えて自我を生きて何にもわからないいううちに終わつてゆく。思想家、識者の言葉も、迷いの世界での模索に思えます。